谷戸の風 ㊺6

乱世の春

山内静夫

今年の冬は寒かった。朝晩身が縮まるような寒さを感じた日が何日かあった。早くそこから脱出したいとそればかり願っていたが、いつのまにか、一ヶ月ばかり暦が過ぎて、アッという間に、話題は桜の開花日の予想になっていた。

日付までは覚えていないけれど、真っ先は四国の高知で、三、四日遅れて長崎、熊本あたりが名乗りをあげた。東京は、靖国神社の染井吉野が基準木になっているようで、そこで四、五輪花をつければ東京の開花宣言となるそうである。都の職員であろうか、中年のおじさんが三、四人頭上の桜の枝を見上げながら、尤もらしい顔付きでうなづき合いながら「ただいま開花しました」と宣言するというまことに古式豊かな、桜の花が開くという華やかさに相応しくないセレモニーをテレビで見たばかり。自然の営みの何と大らかに、ゆったりと美しいのと較べると人間社会全体の営みのなんと混乱、猥雑なことと憶わざるを得ない。

森友文書書き換え問題、レスリング栄強化本部長パワハラ事件、大相撲不祥事等々枚挙に違ないほど嘘とインチキに満ち満ちているように見えて仕方がない。

特に政治の世界は嘘と誠がからみ合ってどこに真実があるのか、一般の社会の人間には容易に見分けが出来ないから何とも不思議でならない。私たちには関係のない世界などと知らん顔をしていたら、とんでもない程大損を蒙っていると知るべきであろう。

一条の光―パラリンピックの選手たち、就中、転倒しながら立ち上って銀メダルとなった選手の闘志。頭がさがる。

木版画　藤本宿

関東大震災の記憶克明に
葉山しおさい博物館で写真展

関東大震災発生直後の被害状況を伝える写真展「関東大震災95年目の記録」が4月22日まで葉山の葉山しおさい博物館で開かれている＝写真。

約70点の写真のほとんどは当時「絵葉書」として作成されたもので、テレビがなかった時代には被害状況を伝える役割があったようだ。国技館や歌舞伎座付近、火災で建物だけが残った銀座の三越呉服店、東京駅や品川駅前で逃げ惑う群衆の姿など、地震と火災による都内の壊滅的な被害の実態が伝わる。

4年後に同じ場所を定点撮影したものもあり、日本橋や銀座などの復興の過程も伺える。近隣では葉山御用邸の車寄せの崩落や歪んだ森戸橋、横須賀市街の様子など当時は軍が撮影を禁じていた同地域の貴重な記録も。

同館は「葉山には都内通勤者も多く、今回は都内の被害状況に重点を置いた。関東大震災を知らない子どもたちにも伝えたい」と話す。入館無料、但しおさい公園の入園料が必要。大人3百円、小人150円。

8日の13時30分、関東大震災を最新の科学で読み解く「サイエンスカフェ」を園内の潮見亭で。問い合わせ同館☎046・876・1155

被災地舞台のミュージカル
「いのちてんでんこ」鎌倉で

「被災地から未来へ、いのちの伝言～ミュージカル『いのちてんでんこ』」が3月10日鎌倉芸術館で上演され、約7百人が観劇した＝写真。

鎌倉市内の被災者支援団体などで作る湘南鎌倉防災ドラマ実行委員会と岩手県大船渡市に拠点を置く制作会社みんなのしるしの主催。3年前（2015年6月）に続き、2回目の一般公演で、今回は三陸の郷土芸能、金津流獅子躍の出演や宮城県七ヶ浜から子どもミュージカルグループNaNa5931と鎌倉からオープニング出演した。

湘南鎌倉地域の子ども達が制作を手伝ったお面を劇中で使用したり、外国人の観劇を想定して英語字幕も導入された。ミュージカルは東日本大震災で被災した若者を中心に、自然の美しさや怖さとともに、伝統文化を通して人と人の結びつき、コミュニティの大切さを伝えている。

観劇した人から「すばらしかった。震災の事を忘れてはいけないと改めて想い出させてくれた」と感想が寄せられた。

（上演実行委員会 岡宏）

新刊
『「明星」初期事情　晶子と鉄幹』
尾崎左永子　著

今年は与謝野晶子生誕140年に当たる。20世紀の幕開けを待つ1900年に与謝野鉄幹率いる東京新詩社から創刊された機関誌「明星」は、晶子がその若き才能を鉄幹への恋心とともに開花させる舞台となった。本書は鎌倉在住の歌人で作家の尾崎左永子氏が長年ライフワークとして各所で発表してきた「明星論」の中から、明星十八号までの初期の時代に焦点を当てた論考を集める。

名プロデューサー鉄幹が自らのもとに集まった乙女たちを旗手として目指した短歌の革新、交錯する恋と友情、アール・ヌーヴォー調の表紙デザインがアルフォンス・ミュシャの絵画を模していたことなど、鉄幹や晶子らの「暁の明星」ともいうべき時代の香気を百年後の女流歌人が丁寧に読み解く。情熱的で奔放とされる晶子の底流をなす古典「源氏物語」に著者の思いを重ねた講演録や、生前の晶子から教えを受けた詩人堀口大學との逸話が紹介される対談も。

2800円（税別）、青磁社刊☎075・705・2838

文学つれづれ
翁と乙女（中）⑯⓪

赤羽根龍夫

折口信夫は翁の源流を尋ねて沖縄へ行き、海の彼方からくる先祖神の「あんがまあ」や「赤また・黒また」に出会い、「実感の学問」として「翁成立の暗示」を受けるのである。結論的に言えば、翁とは異郷から訪れてくる祖霊である。

日本民族の神は「まれびと」として大昔に海の彼方の常世の国から来たのであるが、後に山の彼方の異郷から訪れると考えられるようになり、さらに山の神としての資格をもった地主神になっていった。そして地主神が村人の祖先崇拝と結びついて翁または媼（おうな）という形に固定していったというのである。

『翁の発生』で翁さびを翁舞と考えた折口は、後に「異人と文学と」「翁舞・翁歌」で、老いを嘆くわび歌についての考察を深めていった。

すでに柳田が『古今集』に出て来る老いを嘆く歌について簡単に触れており、折口もそれを受けて『翁の発生』では「古今集の雑の部にうんざりする程多い老人の述懐」と云い、柳田では単に若者の結婚の媒介のためであるとされていたのを、翁舞の歌であると深めていったのであるが、さらに翁さびを「日本文学のあわれの世界」にまでその境地を深めていくのである。

耳を尖らし眼を丸くしたミミズクの様に新しい学問を築いていった柳田国男は、前述のように35歳ですでに翁さびた、慎み深い老人像というものを抱いていたのであり、

柳田国男（左）と折口信夫＝「新潮日本文学アルバム」より

私はひそかに、折口は柳田のそうした翁さびた姿がまんならなかったのだと思う。折口は柳田のような老人にはなりたくなかったのだ。いや、なりたくともなれなかったのであろう。折口は成熟を拒否し、最後まで年はとっていっても若くあり続けることを望んだのである。

「若者よりも、老人の方が若いのだ」。この逆説を彼は生き続けようとしたのであり、それこそが、老いということの秘密であると私は考えている。最後に触れるが川端康成の文学の秘密もそこにある。

『古今集』の雑（ぞう）の部に、20首あまりも老いを嘆く歌が並んでいるが、折口によると古今集の年若い選者たちが、それらの「わび歌」を選んだ理由は、彼らがそれらの歌に「馴れと味わい」とを持っていたからであり、繰り返し繰り返し世々の老人たちが歌った翁歌は、若い人をも嘆かせるまでに、その当時すでに一境地を日本文学の「あわれ」の世界に開いていたのである。

どの歌も、老いを嘆くと言うよりも、わび歌をもてはやす世になってから、よい気になって、気のよい事を言っているように見える。それでもやはり、多くの若者たちに向かって、心おくれを感じながら、洗練させられた心を誇りに詠んでいる趣きに見えぬではない。

折口はこれらの歌の起源は、もともとは常世からきた「まれびと」としての翁が人々に対し誇らかに歌った饗宴の歌であると言うのである。これは柳田の、老人の犠牲の歌という発想に対し180度の転回であろう。

神楽や催馬楽にあるまれびととしての翁が、迎えてくれた家をほめ、水をほめ、酒を讃える「まれびとの歌った饗宴の歌」も民俗が分化して老人に対するまれびととしての尊敬が薄れ、老若対立と云った気分が出てくると、若者中心の儀式などでは、まれびとの感情はなくなってくる。それでかえって老人の優越感が盛り上がって「わび歌」が歌われるようになったという。

柳田のいう老人を大切にしなくなった時代に、「今の若いものはだらしがない。自分の若い頃は…」と気張ってみせたということであろうか。

（神奈川歯科大名誉教授）

明治37年創立
学校法人　鎌倉女学院
中学校・高等学校
心身ともに健康で
国際性豊かな人間教育
〒248-0014 鎌倉市由比ガ浜2丁目10番4号
電話（0467）25-2100（代表）

古書　藝林荘（げいりんそう）
古い本、お譲りください
芸能・美術・文学・宗教・和本・摺りもの等
10：30－18：00　月曜定休
鎌倉市雪ノ下1-5-38（小町通り）
☎0467・22・6533
出張買取無料

かまくらカスター
雪ノ下本店　逗子店
鎌倉駅前本館（かの鎌倉）
ルミネウィング（大船）店

八幡宮前・蒲焼専門店
茅木家
☎（22）1460